

英文校閲の実際 第16話

——代名詞とその数の扱いについて

今回の最初の文例 37 では、主にカンマとセミコロンの使い分けについて学びます。また、2 つ目の文例 38 では、主に代名詞とその数の扱いについて学びます。

文例 37 : Preliminary Single-dose Toxicity Study in Monkeys: (3/7)

Results and Conclusion より

(校閲前原文) : ⑦ The plasma concentration of ABC-123 was increased almost dose-dependently between 10 to 100 mg/kg, however, the values were comparative at 100 and 1000 mg/kg. ⑧ Tmax value of ABC-123 was between 2.3 and 4.0 hours at each dose; however Tmax value was determined by the limited data at 0.5, 1 and 4 hours after each dose.

(和文) : ⑦ ABC-123 の血漿中濃度は、10 から 100 mg/kg の間ではほとんど投与量に依存して増加したが、100 と 1000 mg/kg では値がほとんど同じであった。⑧ Tmax の値は 2.3 と 4.0 時間の間であったが、この値は各投与量における、0.5, 1 及び 4 時間の限られたデータから計算されたものであった。

(校閲後) : ⑦ The plasma concentrations of ABC-123 increased almost dose-dependently between 10 to 100 mg/kg; however, the values were comparable at 100 and 1000 mg/kg. ⑧ The Tmax value of ABC-123 was between 2.3 and 4.0 hours at each dose, but the Tmax value was determined by limited data at 0.5, 1 and 4 hours after each dose.

(解説) ⑦の原文の主語“concentration”が複数形に修正されました。測定対象動物も、測定ポイントも複数のため、血漿中薬物濃度データが複数あるからです。次に述語の“was increased”の“was”が削除され、自動詞“increased”に修正されました。血中薬物濃度の増加を記述する場合、形容詞用法の“was increased”を使うか、自動詞用法の“increased”を使うかについては、第7話の文例 14 に詳細に説明しましたので、忘れた方はそちらをご参照ください。ここでは結論だけを書きますが、血中薬物濃度の測定ポイントが3点以上の場合、途中経過がグラフで確認できるので、継続的増加とみなし、自動詞“increased”を使います。

原文⑦は複文ですが、前後の文章をつなぐ“100 mg/kg, however,”のカンマがセミコロンに修正されました。複文を区切るカンマとセミコロンの使い分けは、前後の文章の関連性の強さで決まります。⑦の前半の文章は、「10 から 100 mg/kg の間では血漿中薬物濃度が投与量に依存して増加した」という肯定文ですが、後半の文章は「100 と 1000 mg/kg の間では同等であった」、すなわち「投与量依存的ではなかった」という、前の文章に対する否定的な内容です。これら2つの文章は異質性が高いので、カンマよりも独立性が高いセミコロンに修正されました。

⑦の最後の“comparative”（相対的な）は、“comparable”（同等の）の勘違いと思われます。

⑧も複文ですが、前後の文章をつなぐ“each dose; however”が“each dose, but”と、⑦とは逆に、セミコロンがカンマに修正されました。前の文章で Tmax の値を記載し、後の文章では、この Tmax の値の求め方を補足説明しているため、前後の文章の関連性が強いいため、前後の関係

がより強いカンマに修正されたのです。また、“however” が “but” に修正された理由は、補足説明の接続詞としては “however” (しかしながら) は重々しすぎるため、“but” (ただし) の方が適切であり、前後の文章のつながりも、“but” の方がより密接になるからです。このことは原文と修正文を声に出して読み比べてみれば実感できます。

⑧の原文の2つの “Tmax value” の前にそれぞれ “the” が追加されました。前の “The” は、“max” という最大級の限定をするための “the” です。これに対し後の “the” は、「この Tmax」、すなわち「前出の」の意味が強い “the” です。

一方、“by the limited data” の “the” は不要です。“data” が複数で不特定だからです。

文例 38 : Preliminary Single-dose Toxicity Study in Monkeys: (4 / 7)

Results and Conclusion より

(校閲前原文) : ⑨ Regarding the metabolites, both M-I and M-II were noted in all animals at 10 mg/kg although its concentrations were quite lower than that of ABC-123: Cmax value of M-I was about one tenth of ABC-123, and that of M-II was about one fifties of ABC-123. ⑩ The concentrations of both metabolites were also increased almost dose-dependently between 10 and 100 mg/kg and are considered to attain plateau at the dose of 100 mg/kg or more.

(和文) : ⑨代謝物に関していえば、10 mg/kg で代謝物-I と代謝物-II が全ての動物に検出されたが、ABC-123 と比べるとそれらの濃度はかなり低かった。すなわち、代謝物-I の Cmax の値は ABC-123 の値の約 10 分の 1 であり、代謝物-II の値は ABC-123 の値の約 50 分の 1 であった。⑩両代謝物の濃度もまた 10 と 100 mg/kg の間ではほぼ投与量に依存して増加し、100 mg/kg 以上で平衡に達すると考えられた。

(校閲後) : ⑨ With respect to the metabolites, both M-I and M-II were noted in all animals at 10 mg/kg although their concentrations were lower than those of ABC-123: the Cmax value of M-I was about one tenth that of ABC-123, and that of M-II was about one fiftieth that of ABC-123. ⑩The concentrations of both metabolites also increased almost dose-dependently between 10 and 100 mg/kg and were considered to attain plateau at the dose of 100 mg/kg and above.

(解説) ⑨の前半の原文は、代名詞の数の誤りが多い「日本人の英語」的な文章です。

書き出しの “Regarding~” (~に関して) は、電子メールの書き出しに使うようなカジュアルな表現のため、同じ意味でも、よりフォーマルな “With respect to” に修正されました。

次に、⑨の原文の “both M-I and M-II were” の主語と述語は、正しく複数形で書かれているのですが、その後続く “although its concentrations were quite lower than that of” の “its” は、複数形の主語 “concentrations” を指す指示代名詞に単数の名詞を指す “its” を使うという不思議な英文です。校閲者は “its” (その) を “their” (それらの) に修正しました。

ここで、SD がなぜこのような不思議な誤りを犯したかを考察してみましょう。

SD が書いた原文の “its concentrations” を日本語に直すと「その濃度」となりますが、「その」で何を指しているかと言えば、前の文章の “metabolites” 以外にはありえません。すなわ

ち、SD が主語を “metabolites’ concentrations” (複数の代謝物の濃度) と複数形の英語で正しく認識しておれば、metabolites’ の代わりに用いる指示代名詞は、“its” ではなく複数形の “their” を使っていたはずです。すなわち SD が “its” を使ったということは、彼の念頭にあったのは英語の “metabolites” ではなく、単数形の「代謝物」であったと考えられます。つまり、SD が⑨のような奇妙な英文を書いた原因は、彼が日本語脳で主語を「代謝物の濃度」と考えており、これを英語にしたとき、「代謝物の」を単数形の指示代名詞 “its” に変えて、“its concentrations” と表現したものと考えられます。

次に校閲者は、⑨の原文の “quite” を削除しました。理由はその後に具体的な数値を記述しているのので、“quite” のような感情な修飾語は報告書には不要だからです。

また、“lower than that of” の指示代名詞 “that” が “those” に修正されました。理由は、英語では比較するものとされるものが同格でなければならず、複数形の “concentrations” の比較の相手が単数形の “that” では同格でないのので、複数形の “those” に修正されたのです。

⑨の原文の後半の文章もまた、「日本人の英語」的な論理的誤りを含んでいます。まず “C_{max} value” の “C_{max}” は最上級の表現なので、その前に限定の “the” が必要です。またその後の比較の表現、“one tenth of ABC-123,” 及び “one fifties of ABC-123.” は共に誤りです。校閲者は “the C_{max} value of M-I was about one tenth that of ABC-123,” 及び “and that of M-II was about one fiftieth that of ABC-123.” と、“one tenth” と “one fiftieth” の後にそれぞれ代名詞 “that” を追加しました。日本語では「濃度は ABC-123 の 10 分の 1」でも違和感はありませんが、それは日本語に論理的厳密性が欠けているからで、英語では “one tenth of ABC-123,” (ABC-123 の 10 分の 1) は明白な誤りであり、面倒でも “about one tenth that of ABC-123,” 【ABC-123 の それ (= 血中濃度) の 10 分の】の、「それ」に相当する代名詞 “that” を省くことはできません。

⑩の原文の “The concentrations of both metabolites were also increased” の “were” が削除されました。投与量を変化させた場合に、血中薬物濃度が投与量に依存して増加する場合に、形容詞 “were increased” を使うか、自動詞 “increased” を使うかは、第 7 話の文例 14 で詳しく説明したので、ここでは結論のみ書きますが、投与量が 4 段階あって、途中経過がグラフで確認できるため、連続的増加と見なせるので、自動詞 “increased” が正解です。

なお SD は、⑩の後半で “are considered” と現在形で書いていますが、過去の試験成績を書く報告書では、考察も含めて、過去形に統一するのが普通です。

上記のように、SD は代名詞の必要性や、数の誤りを繰り返していますが、その主な原因は日本語脳で英語を考えているからです。このような誤りを繰り返さないための秘訣は、「英文を書くときは英語でものを考えること」に尽きます。なぜなら、日本語には一般的複数形がないので、殆どどの名詞、代名詞、及び述語は、実際の数とは無関係に単数形で書かれているので、日本語脳で英文を考えると、主語も代名詞も述語も殆ど単数形になってしまい、おびたしい数の誤りが発生するからです。もし英語の初心者で、英語脳で英文を考えることができない場合は、一応英文を書き終えてから、全ての単数形の定冠詞、名詞、代名詞及び述語について、それらが間違いなく単数か、それとも、単数形の日本語に引きずられて、実際の数とは無関係に単数形の英語になっているのではないかを、改めて吟味し直す必要があります。

(馬屋原 宏)